

はじめに

崎山政毅

本日ご臨席くださいました皆様に、お礼を申し上げます。また、ご多忙の中、講演を引き受けてくださった、京都国際マンガ・ミュージアム研究主幹で京都精華大学准教授の吉村和真先生にも、心より感謝いたします。

世界は、私たちが世界を生き延びるための五感をつくり上げ、深め、変化させ、進展させる様々な刺激にあふれています。日本の大学という高等教育・研究組織が経験してきた歴史を繙けば、それらの刺激に基づく感覚変容は大学に無縁であるばかりか、知のありよう、すなわち学問的知見の生産・保持・蓄積・伝達・展開に直接に関わっていることは明らかです。

しかし、近年の感覚変容は、グローバリゼーションに似て、いやましに速度を上げており、知のありように関わる諸領域においては、自然科学の言葉を借りるならば、「相転移」とでも呼ぶべき転換期に達しつつあると言っても過言ではありません。私たち国際言語文化研究所の研究活動もまた、それに応じて変化を余儀なくされてきています。

とはいえ、ただ流れに乗せられるという没主体的な態度を私たちはとるべきではないでしょう。感覚変容そのものを分析の俎上に載せ、その来歴と未来、意義と問題点を探ることは、破局的变化をさまざまに経験した現在だからこそ必要とされていると考えます。そこで今季の連続講座は、「歴史のなかの感覚変容」をテーマとし、本日はその対象としてマンガを取り上げることにいたしました。

知命を少し過ぎた私の年代は子供のころ、「マンガを読むと馬鹿になる」と祖父母に叱られた経験を持っておられる方が多いのではないのでしょうか。しかし、アメリカ製の映画に刺激を受け、戦前の読み物を耽読するという経験の蓄積のうえに、手塚治虫という屹立する表現者を代表格に築かれたマンガという文化的構築物は、上記のような侮蔑的・差別的価値づけを軽々と超えていきました。

それは越境し、この惑星のあちらこちらに「オタク」を生み出したばかりではありません。また、宮崎駿や押井守の監督作品に象徴されるアニメーションをはじめとした、いわゆるマルチメディア展開に還元されるものでもありません。

だがしかし、書籍流通大手のトーハンが調査した推定データが示す、2006年度にはマンガの雑誌・単行本が総計で12億冊弱、売上総額が4,800億円という規模と広がりに対して私たちは無関係のままにすることはできないでしょう（参照 URL:http://www.geocities.jp/wj_log/rank/hokan/、最終アクセス日2011年10月1日）。

さらに今年（2011年）、まさしく今なのですが、新たな出来事が起きています。去る9月29

日（現地時間）から約半年にわたって、英国博物館で、星野之宣が『ビッグ・コミック』誌に連載している「宗像教授異考録」の特別展が開かれるというのです。権威に頼って論を張ろうというのではなく、書き文字までも含めた広義の「ヴィジュアル・アート」として、そしてまた様々な物語の媒体として、マンガを受けとめる時代はすでに到来しています。

本日の講師・吉村先生のお話は、マンガを同時代のもっともすぐれたメディアのひとつとして日々の生活のなかに意識せず受け容れることができるようになった、「マンガ・リテラシー」の形成と変容、そしてその一方で「読む」という行為に通底する普遍的な文化的諸条件を中心とするものとなることでしょう。

聴衆の皆さまのご清聴と講演後の活発な議論への期待を述べて、本企画開催のご挨拶にかえさせていただきます。ありがとうございました。